

## 沖縄への旅～沖縄復帰 50 周年に寄せて～

私が初めて沖縄に行ったのは、1987（昭和62）年の夏のおわりのことでした。みなさんが生まれるはるか前、もう30年以上昔のことです。夏休み中、バレー部の生徒を連れてずっと遠征に出ていたので、ほんの気晴らしのつもりでツアーに参加したのです。しかし、行ってみてそんな中途半端な気分は吹き飛びました。

まず、那覇に着いて早々台風の直撃を受け、南国の台風の暴風雨には度肝を抜かれました。傘など全く役に立たず、ホテルから出られないのです。夕食は食べたことのないような大きな牛肉のステーキ。当時牛肉は輸入自由化されていなかったもので、本土ではアメリカ牛肉も高価でしたが、沖縄だけは復帰特例で関税がかからなかったのです。

そしてその晩に元「ひめゆり部隊」の女性から衝撃的な話を聞き、翌日には、まだ当時は旅行者が訪れることは少なかったガマ（壕）に入りました。石灰岩地形の広がる沖縄にはたくさんの鍾乳洞があり、戦争中は防空壕や戦闘用の基地、そして野戦病院などに利用されました。私が入ったガマの内部はジメジメとして滑りやすく、また錆びた医療道具などが散乱していました。このような場所での看護活動のために、ひめゆり部隊として動員された当時の沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒たちの写真を、校長室の前の廊下に掲示しておきますから見てください。みなさんとほぼ同年代の人たちの写真です。校長をはじめ生徒の約半数が帰らぬ人となりました。

さて、旅の後半、沖縄本島の中部にバスで移動する途中のことです。道路沿いにビーチパラソルをさして、レンタカーの旅行者相手にパイナップルなどの果物を売る、女子中学・高校生の姿をあちこちで目にしました。とても心が痛みました。農村部に入ると、NHK朝の連続テレビ小説「ちむどんどん」に出てくるような、高い石垣に囲まれた木造平屋建ての古い民家がまだまだたくさんありましたし、ここかしこにさとうきび畑が一面に広がって、「ざわわざわわ」となびいていました。

「さて、沖縄県の復帰は疑いもなく、ここにやってきました。しかし、沖縄県民のこれまでの要望と心情にてらして、復帰の内容をみますと、必ずしもわたしどもの切なる願望が入れられたとはいえないことも事実であります。」

これは、第2次世界大戦で沖縄がアメリカ軍によって占領されたのち、1972（昭和47）年にアメリカから日本に沖縄が復帰した時の、屋良朝苗（やらちょうびょう）初代沖縄県知事の言葉です。復帰前の沖縄から本土に来るにはパスポートが必要でしたし、通貨はドル、車道は右側通行でした。ようやく復帰をした沖縄の人たちにとって、ここにある「わたしどもの切なる願望」とは何だったのか。考えてみてください。

さる5月15日、沖縄では復帰50周年の記念式典が行われました。折しも新型コロナウイルス感染症の新規感染者数がここ数日過去最高を記録し、県民生活への影響が懸念されています。今年の2年生の修学旅行が予定されている11月には、何とか感染状況が落ち着いてくれればと、ただただ祈るばかりです。